

第114回「萩句会報告」 (順不同)

日時 2019年2月11日(月) 14時～17時

兼題「山焼き」

- 川井素山 ○和菓子屋の幟あたらし春きざす  
山焼くや半分白く牛の影  
一<sup>わん</sup>盃の茶店に憩ふ梅二月  
磯菜摘む沖の白帆や忘れ潮
- 保井寶正 ○白梅や滲じむ薄墨五彩あり  
豆まきと春来る日とに囲碁の旅  
ちろり振り無想に遊ぶ春の宵  
山焼や邪念あらがふ阿蘇五岳
- 佐久間喬 ○冬満月山の白さをみがき上げ  
山焼の焦げに萌え出づいのちかな  
凍る道歩む姿の老いてをり  
豆撒いて太巻を喰ひ全てよし
- 丸山酔宵子 ○咲き満つる<sup>うめ</sup>紅梅の隙間の<sup>みそら</sup>深空かな  
<sup>かんりん</sup>寒林を透かしどこまで抜ける空  
山焼きの土の匂ひや蒼き空  
青空を高く突き抜く冬木立
- 菊地崇之 ○湯気たちぬ香り愛でにし菊菜かな  
芋撒いて愉しむ心山火観る  
山王の鳥居に添いて小梅咲く  
ほうれん草豚と咲きしを嗅いで診る
- 吉田啓悟 ○探梅や席をゆづられ青梅線  
旅客機の翼きらめき春隣  
山焼いて戦火知る人佇めり  
就中風が報せる春の距離

- 青木英林 ○あちこちを勢子が走りて山火始まる  
後ろ手に無言麦踏む老夫婦  
残雪の浅間仰いで大欠伸  
春一番自転車倒し吹き抜ける
- 山本草風 ○山焼の煙が<sup>いぶ</sup>燻す青い空  
いきものの精が跳ねるや春の朝  
青々と臓腑も染める春の海  
春の夕人力車夫の欠伸かな
- 渡辺鯨波 ○啓蟄や百寿の父の笑ひじわ  
山焼いて一気呵成にラブレター  
春の昼山高帽の風船師  
着信音ジャズに変更山笑ふ
- 原 晶如 ○藁蛇の辻切る眼玉春の雪  
山焼や走る焰の風の先  
青麦や朝の自転車弾み来る  
その昔摘んだはこべら十姉妹
- 後藤克彦 ○雪吊を外れし縄に残り雪  
恵方巻切って妻とで福分ける  
山焼けに集まる子らの望遠鏡  
古希過ぎてマスクも似合ふ白髪かな
- 永井正孝 ○山焼きの煙斜面を這い登る  
犬ふぐり空き地に青く群れ咲ける  
蠟梅のかをり空き家に満ちみちて  
鳥帰る若芽萌え出る頃となり
- 金森純女 ○まんさくの咲いてほのかにぬくくなり  
山焼くや赤鬼芋を埋めけり  
デコボンと娘のおでこ撫でし父  
ベランダにつがいの小鳥春寒し
- 澁谷瑠璃 ○<sup>かじか</sup>悴めば皆平等に無力かな  
卒業す何者にさへなれぬ我  
山焼きて命の炎なほ強く  
春光や確か前世で会ったひと

佐久間たか子○白梅に紅梅重ね織をなす  
料峭や富士連山を雲はしる  
薄氷をケンケンパーと児らの行く  
山焼の煙の先に青き空

青葉ひかる ○山焼に熱き心のうねりかな  
泡雪に透ける神社は神楽坂  
春北風企業戦士に涙かな  
綱渡り待ち焦がれて春の海

石川智子 ○針供養祖母の縫いかけ見つけたり  
山焼いて無数の虫の墓のあり  
拾いもの集めて楽し鬼やらひ  
春の雪犬も孫らも泥んこに

次回「萩句会」

日時 2019年3月11日（月）14時～17時  
場所 下目黒住区センター第二会議室

兼題 『卒業』『卒業期』一句  
当季雑詠 三句